

特集

広島大学四一年の思い出

一、私の育った時代

ご紹介に預かりました沖原です。広島文理大の頃のお話をする前に、ちよつと私のそれまでの経歴をお話いたします。昭和一二(一九三七)年のことですけども、私は山口県立柳井中学校に入っただんです。なぜ入ったかという、野球をしに入っただけです。あの頃、柳井中学校は強かったからですね、昔は。それで、野球をしに行つて、野球ばかりしていたものだから、とうとう親から山口師範学校へ行けと言われてしまいました、一四年に山口師範学校の一部に入っただけであります。

そして、私たちの世代は、やがて学徒出陣になるんです。それで、私は、一九年に熊本陸軍予備士官学校へ入学しました。好んで行つたわけじゃないんで、行かされたわけでありまして。そこでの訓練は、言つてみれば、この世の苦しみを皆味わつたほど厳しいものでした。

例えば、私の同級生にあまりにも辛いもんですから、近くの山の上に行つて実戦射撃するとき、持っている弾で自分の足を撃つたのがありました。いわゆるかたわ者になつて兵役を逃れようとしたんですけ

ども、そういうことで許されるほどヤワではないですね、軍隊というもの。それで、直ちに軍隊の監獄にぶち込まれてしまいました。同級生はみんな、もう少し頑張ればよかったのにと悲しんだということがありました。

それから、その後いよいよ米軍の上陸予定がはつきりしてきました、鹿児島島の志布志湾か天草かのどちらかに上陸するという情報がいりましたので、みんな守備のために行かされたんです。私たちは天草に行きました。ただし昼日中に船では行かれないんです。制空権はアメリカが握つてましたからね。だからアメリカの飛行機がしょっちゅうその辺の山の上をふらふら飛んでいるわけです。そして、時にバーツと襲つてくるわけですね。そんな状況ですから、天草には夜船に乗って行きました。土砂降りの雨の中、棧橋に着いたんですけども、上陸して隊長が数を数えてみたら一人足りなかったんです。実は上陸の時に海に落ちて死んだのだですね。軍装の場合には弾丸、鉄砲、米からいろいろ持ちますからプラス四〇キロになるんですね。ですから土砂降りの雨の中で海に落ちたんで、そのまま死んだということがありました。

沖 原 豊

陸軍予備士官学校では陸軍少尉の称号をもらいましたけども、それは今では何ということもないんです。

まあこんな話は何にも皆さんのお役に立つようなことではないんですけども、そういう状況の中で私たちの世代はやってきたということです。

二、広島文理大への入学

昭和二三年になりました、私は広島文理科大学に入学することになります。二六年には文理大の研究科に入学しまして、二七年には中退いたしました。私もよく覚えてないんですけども、二七年の九月一日に広島大学教育学部教務雇というのをやっただけですね。教務雇というのは何ですかね、事務方でもない。そしてすぐに、二八年の四月ですから、一年も経たんうちに助手になりました。

——先生が師範を出られて広島文理大に入学された動機は何ですか。

まず、文理科大学というのは東京文理科大学と広島文理科大学の二つしかなかったですね、ご承知のように。ですから、そういう意味ではよく知られていた大学ですので、そこに入ってみようかという気もあつたんです。それに例えば東大とか京大とか受けてみるとかいうほどの気持ちはなかったし、またそれだけの力もないと思っていました。それから経済的なバックグラウンドにも不安がありました。それに比べると、文理科大学ということになると入りやすいのかも知れないとい

う思いもあり、そしてまた私は若いときから教育に関心を持っておつたもので、私としては文理科大学に入ったわけです。

三、新制広島大学創設の頃

——ちょうど先生が文理大に入学された頃には、新制広島大学の設立運動が盛んだった頃だと思いますが、その当時の様子を教えてください。

これはね、だいたい文理科大学のなかには、文理科大学を保存してほしいという人もおりますよ。おりますけどもやっぱり大学としては文理科大学よりは広島大学ができた方がですね、いろいろな先生方もたくさん来られるだろうし、それから優れた先生も増えてくるだろうし、いい教育も受けられるんかも知れないという気持ちはありましたね。東京と広島にしかなかった文理科大学というので、名はよく知られていたんですけども、私としてはやっぱりいろんな学部を持った総合大学としてですね、大学が充実していく方がいいと思っていました。

——それでは先生をはじめ当時の文理大の学生は、広島大学を新たに設立し、その中に文理大が包括されるという方向性を歓迎していたということでしょうか。

そうですね、別にそれを学生が強く反対するというのはなかったと思います。文理科大学を大学にせいかね、大学は今の文理科大学があるじゃないかと、そういう意見は学生にはなかったと思いますね。

——二四年になりますと、新製の広島大学の学生が入学して来ます
が、その広島大学の学生との交流はございましたか。

スポーツとか何とか一緒にやってたんじゃないですか。だから、たまたま文理科大学があつて、それから広島大学というのができて、それらがやがて統合されていくんだという感じでしたけどね。

だから文理科大学と広島大学というのは全く別なものじゃなかった、キャンパスではですよ。だから昔の人がやってきた文理大というのは、だんだん広島大学に吸収されていくわけですから、文理大をはねたわけじゃないですよ。飲み込んでいったということ。

四、ユネスコクラブについて

——先生は文理大の学生のとくに、広島学生ユネスコクラブの委員長をされていたようですが、そのきっかけは何ですか。

これはね、やっぱり、ユネスコという活動をね、一生懸命やってる知り合いがおつてですね、一緒にやらんかということもあつてやつてましたね。ユネスコ運動というのは世界的な問題ですから。若い学生がそういうことに関係していくのはいいんじゃないかという気持ちでした。それで関心を持ち始めたんですね。それでユネスコクラブというのが大学にあつてもいいというので、かなり一生懸命やったと思います。

しかしまあ、ユネスコと言っても初め頃ですからよく分からん人多かつたんですよ。ユネスコ活動やっておりますと云ったら、どの

猫の活動ですかと言われた時代ですからね。

しかし、ユネスコ活動というものは私は大切ではないかと思つて、できる範囲内でやったと思いますけどね。

そういうえば、私の教え子で、ユネスコについて勉強させておつた矢加部というのがこの一八七ページに(沖原豊学長退官記念誌刊行会編『広島大学四十一年の日々』第一法規出版、平成二年——編集室注、以下同様)書いてますので、ちょっと読んでみます。彼は後に広島大学から抜かれて文部省の職業教育課の課長補佐になったですね。日本ユネスコ国内委員会委員にもなっています。

第二次世界大戦の直後、二度とこのような戦争が起きてはならず、諸国民の間の疑惑と不信を人類の知的・精神的連帯の上に取り除くことを目的として、教育、科学、文化の協力と交流を通じて国際平和と人類の福祉の促進を図るため、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)が昭和二十一年一月四日、加盟国間の国際条約によって創立された。

わが国においては、このようなユネスコの理想に賛同し、平和を希求する民間ユネスコ運動が戦後まもなく仙台市を中心に起り、やがて全国の各地で活発な活動が展開されるようになった。その結果、昭和二十六年に日本のユネスコ加盟が実現した。これはサンフランシスコ講和条約により日本が独立を達成する前のことであり、わが国の国際社会復帰への第一歩であつたといえよう。

沖原先生は、学生時代に広島地区の学生ユネスコクラブの委員長として全国大会を開催するなど、早くからユネスコに大きな関

心を抱いておられた。そうしたことが高く評価され、昭和五六年に日本ユネスコ国内委員会の委員に任命された。

というわけですね。まだ、講和条約前ですから独立は認められてなかったんですけど、ユネスコは先をいつてたんです。

今でも思いますが、やっぱりユネスコ活動などのように、対外的な、外国にも目を据えたような、そういう活動がですね、学生はもちろんですが教員にしてもですね、そういうことに関わる人が少しでもおることはいえことじゃないかと思えますけどね。ただ日本のことだけになるとですね、視野が狭くなるんじゃないかと思えます。

五、長田新と森戸辰男

(宇吹) ちょっとお聞きしたいんですが、私は長田新と森戸辰男の関係というのをずっと考えておりました、ちょうど新制大学になる前の資料なんかを見ておりますと、もう長田先生が学長になれるのが当然の路線だというふうに考えておるような雰囲気があるんですね。

私はそう思ってたです。

(宇吹) 長田先生自身はそれ以後もずいぶん社会的な活動を活発にやっておられますね。

その一つは『原爆の子』ですね、岩波文庫の。あれを編集しておら

れるでしょう。

(宇吹) 片っ方ではですね、森戸先生の場合、私が聞く限りでは、そういう社会的な活動をどうも制限してたような印象があるんです。それで、具体的な例で言いますと、日本原水爆被害者団体協議会の初代の事務局長をやられた方なんです、藤居平一といわれる方がおられます、森瀧市郎先生がですね、昭和三〇年にアジア諸国民会議の代表に選ばれたことがあるんですが、そのお金がいるということで、その藤居さんがですね、中国新聞の社長と浜井信三市長の了解を得て、森戸学長にもその話をしに行くんですね、頭ごなしにあればいけませんということですね、森瀧先生がもし行くんなら、職を辞して行かんといけんような言い方をされたらしいんです。

森戸さんが？

(宇吹) はい。それで中国新聞の山本社長がOK言うておる、市長もOK言うてるのに、この森戸学長が反対をしたから非常にけしからんと思うた、いうふうに藤居さんが言っておられるんですね。その後、森瀧先生が職を辞して座り込みをやられるんですが、その当時はもう森瀧先生本人が腰砕けになって、またこれも冴えんということ、藤居さんがえらい怒っておられて、自分がもう財界とかマスコミとか大学人というのはあてにできんというか、自分が本気になってやらんといけんというふうに考えられたというふうに言われておるんですね。

それともう一つは法学部におられた北西允先生が組合を作っているところとして森戸学長のところに相談に行くと、やはりこれも頭ごなしにもう何回も怒鳴られたというようなことを言うておられるんですね。どうもそういう社会的な活動というのが、森戸学長だったのがゆえに押さえられた面があるんじゃないかなと思うんです。それで長田先生の方は今度は、大学と関係がない形で社会的活動をやったというか、なかなかそういう社会と広島大学の関係が結びつかずです、やりたい人は個人として勝手に社会的な活動をするというようなスタイルが、この長田、森戸の関係の中でできたんじゃないかというような仮説を立てておるんですが。

そりゃ、両方がどっちが上かというのを張り合っていましたからね。

(宇吹) やっぱ張り合うという面はありましたか。

ええ。そりゃ、長田先生としては広大のトップとってた。そこへ森戸さんは天下ってきた。そういうところで齟齬を来してますよ。

(宇吹) 長田先生が張り合うというのは、立場上分かるんですが、森戸学長の方もかなり意識はされておったんですか。

そりゃしてますよ。それはやっぱ、政治家ですからね。森戸辰男学長は、ご存じのように有名な方で、元文部大臣だったですよ。こ

の人が、広大に来て最初にやったことは何かというね、「学長を教える会」というのを作られたんですよ。とにかくこれには皆びっくりしましたね。その会には各部署から一人ずつ一人が選ばれたのでありますけれども、私もどういいうわけか選ばれていました。なるほどやっぱ偉い人は偉いなと思ってね。こういうふうにして、いろいろ情報を収集したりするんだなと思いました。広島大学にばつと来たから頭下げてるわけですよ。「学長を教える会」といったらもうそれだけで頭が下がったかというのは周りがみんな思うから、森戸さんの言うことはみんな聞いてね、どんどんどんどんやりましたけどね。

(大林) 「学長を教える会」というのは定期的に開いていたんですか。

いや、それほどはやってないと思う。ちょっと記憶が定かでないですが、「学長を教える会」はやっぱ森戸さんが望まれたことですからね、だからある程度の回数はやりましたね。こういうことを考えてくれとかね。文部大臣したぐらいだからいろいろな人を使うようなことは非常にうまかったですね。私なんかでもよくね、森戸さんの家に招かれて行ったことがあるんですよ。招かれて行って我々は若い時代ですから恐る恐る行くんですけども、そこでいろんなことを聞かれて、森戸さんとしては情報収集ですな。学内のね。

こういうところで森戸さんはさすがは政治家だなというような気がしましたね。別に政治家だから悪いということではないですよ。だから長田先生と森戸さんというのはタイプが全然違うわけですね。どっ

ちもいいんだけど、どっちかが好かれるというかあるいは、どっちかが教える立場を出すのかね、そういう点がありますよね。それで森戸さんはね、わりかし若い者に非常に関心持って、私とか、森戸さんの家に呼ばれてたです。だから学長として、学内に連絡があるようにね、浮きあがらんようにというようにしておられたんじゃないですかね。

その点、長田先生というのは一本気でしたね。長田先生は私の直接の恩師だけれどもやっぱり教育学者であって、森戸さんのようなそういう幅の広さみたいなものはなかったですからね。まあ、結局森戸さんが学長になっちゃいましたよね。長田先生も文理大の学長だったけども、新しい広島大学の学長には森戸さんがなったわけですからね。

森戸さんは行政的にね、私なども関係しとったという関係ですが、長田先生は私の本当の恩師です。長田、森戸、この二人が広島大学の巨頭でしたね、やっぱり。この二人がおられて本当によかったと思いますね。

(宇吹) 先生、もう一つあるんです。以前先生から長田先生の長野県の実家の方に資料があるというお話伺ったことがあるんですが、今回広大の五十年史ということですね、そのあたりの資料の調査なり何なりというようなのはやらせてもらえるというような雰囲気なんじゃないか。

それがね、今までできてないんですよ。私も行って見たことはありますけどね、頼岳寺というお寺の近くに、ちよつとした小屋、小屋じゃ悪いが、ありましてね、そこへみな入つとると長田先生が言われてたんですね、書類やら本とかその他ね。でもどういうわけか見せてもらえなかったですね。それは今後努力しないといけない、何とかお願いすれば可能かもしれません。この間も私の家に長田先生の息子さんの長田五郎さんが来られたんですが、そちらに頼るしかないかなと思つたんですよ。

そりや確かに私もそこまで行ってみたことがあるんですけど、入れてもらえなかったです。その長田先生のたくさん書類、文書ですね、それはやっぱりいろいろ見たいもんですね。

六、研究上のエピソード

研究業績が書いてありますので(当日配付資料、『広島大学四一年の日々』三〇一〜三二三ページの再録)ちよつと私の研究についてお話しします。

『日本国憲法の教育規定に関する研究』というのは、私が初めてのようでした。日本国憲法に教育に関する規定があるんですが、それに対しての説明は今までなかったんですけども、それをこのとき少し皆さんによく分かるように研究をしました。昭和五五年にはそれを改訂して『日本国憲法教育規定研究』を出しています。

そして、私の力を入れたのは『比較教育学』(Comparative Education

という本で、これは諸外国の教育のあり方をずっと比較して検討したものであります。

それから『沖繩の教育』。沖繩というのは非常に気の毒な所で、第二次大戦なんかで沖繩は非常に壊滅的な被害を受けたわけですね。沖繩には広大出身の私の教え子がおったりしましたので何度か沖繩へ行つて、沖繩の教育を研究したことがあります。

それから日本の教育界ですね、みんながびっくりしたのは学校掃除という問題で、これは、『学校掃除―その人間形成的役割』です。

これは学校掃除をこうやれああやれというのじゃなくて、学校掃除というのは掃除を通じて人間形成をするために大切なんだというものです。だから学校で掃除をさせないとか掃除をさぼるとか、しないのはまあしょうがないということは間違いだと、学校掃除というものは、教育上で非常に大切だという話です。これはまあ皆さんそういう環境に育つてこれたでしょうから、よく理解して頂いてると思います。

それから、これも非常に興味持つて頂いたんですけども、校内暴力の研究ですね。戦後、日本の乱れというのは、アメリカの占領下ですすね、非常に青少年のマナーとかその他が乱れてきたことは皆さんご承知だと思いますが、それで校内暴力というのが非常に全国的に普及しましてですね、教師が殴られる蹴られるあるいは生徒同士が暴力を振るうという、こういうこの校内暴力というものを防がにやならんというので、小学館から『校内暴力、日本の教育への提言』というので、いささか日本の教育の復興にですね、役立てて頂いたんじゃないかと思ひます。

その他、秋季入学に関する研究があります。日本の場合入学は春、四月ですよ。これを欧米並にですね、秋季入学にせよということが財界のトップの人をはじめですね、声が高くなつて、日本にも秋季入学が実現しそうな時がありました。この時文部省から連絡がありましてですね、何とか阻止してくれとは言わないけれどもですね、このことについてひとつ考えてみてくれないかということでした。

私は、これは大変だと思ひ、それで私の研究室の教職員を動員してですね、秋季入学に関する研究というのを致しました。まあ今詳しいことは申し上げられませんが、もしご関心がある人は、この研究についての報告を六二年に第一法規から『秋季入学に関する研究』として出しましたからご覧ください。

結論だけいいますと、わが国で秋季入学は、とてもできないんだということを書いてですね、これを文部省に提出しました。そしたら、それを見た財界の大御所の人、中山会長（中山素平、臨時教育審議会会長代理）がですね、私を呼ばれてですね、あなたのを読んだと。それで、大変残念ながらあなたの言つてることが正解だと思うと。日本で秋季入学はできないことは残念だが、沖原報告の内容については高く評価して出版をしたい。今後もその他教育関係についてひとついろいろ頑張つて下さいということを言われました。私は秋季入学が通るか通らないかというのは非常に心配だったんですけども、このように秋季入学は、日本では実現しませんでした。それで今でも春から始まつてゐるわけでありまふ。

その他、私の本でお粗末なものですけど外国語に翻訳された著書といたしましては、『世界の教育』というのが中国で翻訳されておりま
す。それから二番目が学校掃除、学校掃除が研究になるんかと、皆さ
んが思ったようですが、それにもかかわらずこれは韓国で翻訳されて
います。それから三番目は『世界の学校』、これは中国語訳ですね。
四番目の『体罰』もこれは韓国語です。韓国・中国あたりでかなりた
くさん翻訳されてるわけでありま

七、大学紛争の悲しい一面

——先生が学生委員や学生部長をされていた時期は、大学紛争の真っ
直中でしたが、この時期で一番印象に残っている出来事は何で
すか。

略歴（当日配付資料）にあるとおりですが、学生部長は三選させら
れまして、まあくたびれました。あの頃は学生が非常に暴れ回って
るときですからね、そのときに学生部長を、それも三回もやらされて本
当に私も腹が立ったんですけども、まあやむを得ずやりまして何とか
治めたわけです。

その当時の大学紛争というのは学生が非常に厳しくてですね、中核
派ですからね。広大の場合はほとんど中核派で、彼らが暴れ回ってい
たわけです。その中核派のなかでの、その当時の学生の悲しい一面を
申し上げますと、中核派はデモに出るとき、最前列の者が棒を持って
ます。その役にベテランが四人つくわけですが、そのすぐ後ろにです

ね新人を入れるんですよ。私は学生部長なんてついて歩いたから、
どうしてこんな経験もないのを前に入れるんかな思ってた見ました。

一〇〇人以上デモの人数が出ていますが、それに対して今度は機動
隊が出てきましてね、止めるわけですよ。それで機動隊がかかれと言っ
てから棒を持って来るわけですが、そのときに一番前におるベテラン
はターツと逃げてその後ろにおった者は逮捕されるようになってるん
です。それでその逮捕された者が、監獄にぶち込まれたりするんです。
それでただ逃れようとすれば四〇万円か金を積めばですね、なんと
してもらえんということですが、それですぐにその学生の実家
に電話して二〇万円すぐ送ってもらうよう言っちゃりましたら、返事
にはお姉さんが出てきてですね、「私の家は大変貧しい家庭でとても
二〇万というお金は出せません」という返事が来るんですね。そした
らですね、すぐ中核派から二〇万円が出されるわけです。そうすると、
もうとても中核派の運動から逃れることはできないという状況になっ
たりしました。

そういうことを私は学生部長として非常に残念で悲しいと、何とか
できないかということ、三期六年もそういうことをさせられました
けども。それからその当時ですね、女の学生でもものすごい力のある者
がおって、それが女の学生を統括してるわけですね。それでそれも暴
れるんです。余談ですがその女性が今から三年か四年前に私の家にやっ
て来ましたが、今でも精力的でしたね。

八、日本の大学の厚生補導

——先生は学生部長の頃に、日本の大学で何がいけないかというと、欧米でいわれるSPS (Student Personal Service) というものを日本に持ってくる際に、訳語として厚生補導としてしまったことであり、これは本当は学生サービス活動と訳すべきだ。この訳語のせいでもう概念の段階から違ってきてしまっているんだとおっしゃっていますが、その点についてお教えてください。

アメリカから輸入されたSPSという言葉が、日本では厚生補導と呼ばれていたわけですが、その概念の定着がまだ不十分じゃないかと感じました。もっと徹底的にですね、学生に対するサービス活動、サービスと言っても低次元なことじゃなくて、ここにも書いてある『広島大学四十一年の日々』一一九―一二一ページ)と思いますが、アメリカの大学では学生を、知育だけではなく全体的に捉えようとする見方、学生の個性を尊重する考え方、学生が大学の学生サービス活動に参加することにより学生自身が成長するという考え方が、大学人の共通した教育観となると言われているんです。

それで私もびっくりしたんですが、「私も、沖原先生の意見に賛同するものである」と前東京大学学生部長の小林靖之さんが書いていますね。

今、私岡山の就実女子大学の学長をしています(当時)けど、やっぱりSPSの考え方が非常に足りないですね。就実女子大学というのは古くからある名門なんです。私が行ったときにびっくりしたんですけ

れども、私学は学生から授業料は高く取るんですが、学内を回って見た第一印象では花がないんですね。そう言いましたら翌日はプランターが六〇個配られてました。花をどっから購入したんですね。

ところが、そしたらすぐ山陽新聞の記者がやって来てね、あなたのところはおかしいじゃないですかって言うんです。何がおかしいんですかって言ったら、お宅は「去華就実」でしようと言ってます。「去華就実」というのは大学の方針ですが、華を去り実にくということ。その去華の「華」をね、その山陽新聞の記者は「花」とまちがって考えたわけですね。去華の華というのは華美の華であってですね、華美になることを避けて実際的なことに就くということだ、ということを書いた記者に言ったらやっと分かりましたと言って帰りましたけどね。

花の香る学園というのは決して華美なわけじゃないんで、プランターを置いたりとか、木を植えたりとかやっています。今ハナミズキというのは私が植えさせたんですけどね、ハナミズキというのは皆さんご承知でしょうが、あれはアメリカの産でして、アメリカと同じ緯度の奥羽地方にわたって来てですね、それから日本列島をずっと南下して行くわけですね。この辺もあるでしょう。ハナミズキというのは花が咲いた後は葉が紅葉して真っ赤になる、それが落ちたら今度は赤い実が残るんです。花と紅葉と実というので三度見れるということで、国際的にも非常に評価されてるんですね。ちょっと横道にそれました。

—— 実際学生部長をされていた頃に広大の厚生補導というのは足りないところがあるという実感がございましたか。

ええ、それはありましたですね。だから進んで学生の困ってることを助けてやろう、解決してやろうという姿勢でいかないと、何でもうまくいかないと思うことが多いですね。

例えばオリエンテーションキャンプというのも、学生に対するサービス活動のひとつです。あれは宮島で実施した行事でしたが、かなりたくさん学生の学生を連れて行きました。

大学の使命というのは教育・研究というでしょう、しかしもう一つ厚生補導があるということがやっぱり大切なですね。厚生補導というのは学校教育法にも書いてありますが、その内容としてどういうことをしたらいいのか、戦後に導入されて以来、実はあんまりはつきり示されていないんですね。ですから厚生補導とは何かという点についてはいろいろな見方がありますが、重要なのは学生のためになるように、いろんな観点から努力するということですね。その意味で学生部が非常に大切になってくるんです。

(大林) オリエンテーションキャンプは、先生が学生部長の時に全国の大学で初めてやったと伺っているんですけど、予算を文部省からつけてもらうのにご苦労なされたというような話も聞いています。ところでオリエンテーションキャンプが始まったいきさつをお話頂けませんか。

それ以前から、学生がね、部分的に有志の者でやってきておったんですよ。少しずつね。それを私が見に行ったことがあるんです。すると学生だけがやるわけですから非常にお粗末なやり方だなと感じたんですね。

オリエンテーションキャンプというのは非常に大事なものですよね。まず自分自身が動かなきやいけないわけでしょう。ものを作ったり、テントを立てたり、それから食べ物作ったりいろんなことをやらないといけない。そこでいろんなことを学ぶんですね。学生だけでやるのも学生には喜び、楽しみなんですが、それを正しく、きちんとやるためには、やっぱり大学の認めた行事としてですね、やらなきやいけないと。それで、あれを大学の行事にして宮島へ連れて行ったわけですね。そうしましたら学生が非常に張り切りましたからね。あれはよかったんじゃないですかね。私も行きましたけど非常に活き活きとやりましたね。

(大林) 五月病とかありましたから、そういう対策として考えられたのかなと思ったりもするんですけど、どういう意図だったんでしょうか。

いや、学生が何かことを起こしそうだから、みなじゃあ連れて行こうと、そういうことはなかったですね。ただ行ったことで、学生は随分こういうことで喜ぶんだとかね、あるいは声をかけてやれば喜ぶんだとか感じるでしょう。そういうことは学生を知る上で非常に参考になりましたけどね。それからテントを張ったりしてキャンプする

のは、やっぱりあそこに行かなければできない学生がたくさんおったですね。行って学ぶということでしたね、あれは学生にとっても良かったんじゃないですか。

話は変わりますが、体育会が一〇周年で企画した学生友好訪中団といったものも、良かったですね。中国なら中国行くだけでもそりや意味がありますよ。それから韓国とかね、韓国・中国、今頃は非常に呼びかけると反応がいいですね。それで、韓国・中国との交流をおしていろんなことを学ぶこともできるしですね、だからこういった行事も非常に私は大切だと思うんですよ。さきほど言ったようなユネスコの活動なんかもやっぱり少しずつ学生たちに経験させていくのが大切じゃないかと思えますね。

これもちよつと余談ですが、私は昭和四七年に総理府関係の第六回「青年の船」の団長に任命されました。私はそれ以前に早くから青年の船の団員に入っただんですが、この時は団長にさせられて、これは大変困ったなと思って行っただんです。東京を出て東南アジアを通過して、それから豪州・ニュージールランドあたりを通過して帰ってくる船旅です。いろいろ見学もさせてもらいましたが、何しろ責任が重くてですね、大変辛かったです。

しかしある国で私は初めて経験したんですけども、船から降りて迎えるの車に乗るとですね、赤信号なんか突破して、全然無視してダートと車が走るんですね。それで私がびっくりして、これは赤で止まらなきゃいけないんじゃないですかと言ったら、いやあなたは日本の代表ですから心配しないでいいんだなどと言うんですね。とにかく驚きまし

たね。そういうこともあるんだなということを経験したんです。これは今でもよく頭に残ってます。こんなことも外国に行ってみないとわからないことですよ。

ところで森戸さんが学長になられた時に国際性のある大学を作るといわれましたが、これは広島大学を国際的に通用するようなものにするということでした。そのためには留学生をたくさん招くとか、あるいは留学生を海外に派遣することが重要になるんです。これは私もずいぶんやりましたが、これは大きな影響がありますね。海外行つて帰ってくるとやっぱり学内に対する影響がありますからね。大学の国際化ということについてはプラスになると思います。

九、教育学研究科の整備

——先生が教育学部長時代で特にご苦労されたことのひとつに、すべての専修に大学院博士課程後期を設置されるという大きなお仕事をされましたが、そのときの「ご苦労をお話しいただけますか。

学部には、教授が何人もおるんですね。ところが大学院を創るときに、それが全部ね、研究科担当に認められるかというと、なかには無理だという人がおるでしょう。それは非常に辛いなと思ったんですよ、私としてはね。しかしそれを、その人たちのことを思ってから、全部研究科担当予定者に入れてですね、仮に文部省に出したとするとね、落とされるでしょう。そうすると全体がうまくいかなくなる可能性があるから、それはやっぱり書類を見てこつちが考えてね、先輩であつ

でもこれはちょっと無理じゃないかという人をみな省いていったですね。私個人がやるんじゃないですけどね、何人かで。それで文部省に通すためにはやっぱり説明に行かんにゃいかん。説明に行くと、ひどく言われるときもあるけども、やっぱり多少偉そうなかつこうして、貫禄をもって行かなきゃいかんということはありませんね。

（大林）先生が学部長の時期、福山の大学院担当の問題がございましたね、あの件ではずいぶんご苦労なさったんじゃないかなという気がします、いかがですか。

ええ、福山をおいていくわけにはいかなかったからね。こっただけ大学院創って、福山を放つとくのはね。福山には旧制の女子高等師範学校があったんですよ。ところが広島大学はちよつとあんまりその面倒をみなかったような感じがあるよね。福山は広島から離れてるからいつも面倒みてもらえないというような雰囲気があったと思います。それでこれはやらなきゃいけないという気がしてその時はやったと思いますけど。

それでいよいよ大学院を創るというときに、あれも全部ほとんど何とか入れていこうとしましたね。だいたい全部は無理かも知れんが、ほとんど入りましたよね、確か。福山の先生なんかは、体育なら体育ですばらしい人がおるんですよ。音楽なら音楽でね。でも処理するということになるね、行政の判断がありますからね、苦労したんです。福山分校を吸収してね、それを大学院と同じようにしていく、大

学院並の取扱いをするというのは非常に難しかったけども。でもある程度はできたと思うんですけど。

一〇、大学の授業改革への試み

——昭和五三年当時に放送大学の放送講座の単位を認定するといったことはかなり思い切ったことだと思んですが、それはどういう状況で話が進んだんでしょうか。

そこにも『広島大学四十一年の日々』（一二八ページ）書いてありますが、私も学生部長で文部省に行つてずいぶん言われたですね。教育は教室でするものだ。放送教育とか何とか教室の外でしょう。だからそれに対して教育は教室の外するもんじゃないと、何かこういうことまで言われて、これをそういうこと言つた人はおかしいと思うんですよ、しかし、やがてこれが認められるようになってきて、いろいろな大学へと拡大していったんですね。その後には逆に文部省がやってくれ、やってくれというふうに変わつていった。

ところで特別な授業といえば、カープに衣笠つてのがおるでしょう。あれが学長室に来て、非常によくいろんなことを言うので、いつペン君、授業をやらんか言うたらやりますって言つてね、やったんです。

この衣笠の授業は、学生がすごい多いですからね、五〇〇人ずつでなきゃそれ以上は教室がないんですよ、これを毎週やったことがありませんね。衣笠が一生懸命やつてですね、それでそれを今度は文部省が、文部省の各部屋にテレビがありますよね、文部省には全部、それ

が全部衣笠の講義を見ておったんだそうです、後から聞いたんですがね。

そういうことも、これは偶然から出たことでしたが、大学の授業は大学におる人が、がちがちとやることも大切だけれども、よそからね、ちよつと来てやるような人も必要じゃないかということを非常に痛切に感じましたね。衣笠も、だから私の学長室において、授業時間が来るのを待つておりましたら、そのとき原稿か何かを書いてですね、時間が来たので衣笠さん一つお願いしますって言ったら、原稿を全部バーツと裂いてね、捨てて行ったから、いやこれは案外やるぞと思つて見とりました。

衣笠が「私は広島カープでも下手くそでね」って言つて、「サードを守つとつて、トンネルしてどんどんどんフェンスまで走つていくと、衣笠の馬鹿野郎、下手くそつて言われる」つてことを学生に言うから、もうみんな大喜びでね、そういう人もおつていいと思いますね。

ところでまもなく、文部省の中央教育審議会に私が委員として出ましたら、なんとある日に私のそばに名前が書いてあつて衣笠が座つてるからね、びっくりしてね、やつぱりやるもんだないうて思いましたね。特別講義みたいなものをやつてみせると文部省の人も、なるほどこれはおもしろいと思えば、それに対応するということはありませんね、やつぱり行政ですからね。

本学でも何か、みんなが納得するような少し変わつとるような新しいつていうのがあればですね、どんどんやつてみた方がいいんじゃないですかね。そうすると先生方も学生もちよつとは新しい雰囲気になるでしょう。衣笠で、広島大学はあのときは非常に世の中に出ました

よ。テレビで、文部省がね、全部見とったというだけでもずいぶん違つて、そして事実彼はもうさつき言いましたように、文部省の中教審の委員になってますからね、評価されたんですよ、それがね。

(頼) 先生と衣笠は以前からもうお知り合いだったんですか。

いや、違いますね。この頃は広大の学生がもう毎日難しい先生からあんまり聞きたくないというような雰囲気があつてですね、それで衣笠を一つ出そうかと言つたに過ぎませんね。そしたら授業にものすごい学生が増えましたね。教室に入ってくるのがね。だから毎日の難しい授業も大切なんですが、ちよつと時々そういうのをボンと入れるということはいいいことじゃないかと思ひましたけどね。まあ、そりや衣笠に限らず誰でも、ちよつと、ああ、あの人かと、聞いてみようかと学生が思うような人をね。その点衣笠は最適だったかも知れませんがね。衣笠はあまり恵まれた環境に育つたわけではないんですけど、それがどんどんどんどん成長して、野球で活躍し、一方で文部省の中教審の委員にもなつてるといふことを見るとですね、やつぱり一生懸命頑張れば認められるんだよというような気がするわけですね。

一一、誘致運動に辟易

(大林) 最後に一つ、学長時代のことですけども、先生が学長をおやりになつた頃から移転が、それまで滞りしてきたものがスムーズに

運び始めたのかなと思ったりもするんですけども、統合移転計画の完了を早めるとかですね、そういうことで苦勞なされたことがございましたらお話頂きたいんですが。

それはやっぱり、東千田ではちよつともうこれ以上のことはできないという気持ちになりましたよね。狭いところでしたからね。それじゃあ東広島かということになるんですが、これはやっぱり広大だけの中の話し合いだけではなかなか解決できなかったですね。だからこっち来るならこっちの方にまず認めてもらわないといけないしね。それもあるし、で、ここがいいのかもつと他がいいのか、なかなか私ひとりでは判断が難しいような部分については、いろんな意見を聞いて参ったわけですね。まあちよつと遠すぎたかなと思うけど。

(大林) 西条に決まってくる経緯はご存じないですか。

もう細かなことは忘れちゃったけど、まあ非常に急がなきゃいけないという気持ちでやってたことは間違いないですね。西条もそうだったと思うんですけども、来てくれ、私の所に来てくれというものすごい陳情があつたですからね。

ある所なんか私が研究室に入った直後に、数人ぐらいグーッと入って来られてね、私怒鳴ったことがあるんですよ。「何にもノックもしないで入ってくるとは何事だ」と。それはいいけども、要するに陳情ですよ。西条の人がいたのかどうかちよつと忘れてしまったけど。あつ

たかも知れんですね。でも、かといって、私がOKと言ってすぐ決まるもんじゃないですよ。やっぱり大学には学長もおるけども単独で決まるわけではなく、いろいろ協議するような形になりますからね。すぐおいそれと決まるわけにはいかないから、いろいろ検討されてるんですよ。あの頃はもう新聞記者がもう付きつきりですからね、私たちの廊下におつて、どこへ行くだろうかというので、大学はね、西条行くのかどこ行くのかという、マスコミは非常に関心があつたですね。

(大林) 誘致運動には政治も絡んでたと思うんですけどね。そういう誘致運動は効果があつたんでしょうかね。

ここに効果はあつたんじゃないですか。でも西条、広々としとつていいじゃないですか、ここは。

——他に質問がございませんでしたら、定刻を過ぎておりますので、この辺りで研究会を終了させていただきます。本日はどうもありがとうございます。

(おきはら ゆたか・広島大学名誉教授、第七代広島大学長)

解説

本稿は、平成二十一年三月一二日に大学教育研究センター(当時)の

センター長室にて開催した広島大学五十年史編集室主催第五回研究会の内容を文章化したものである。少人数の座談会形式をとった都合上、文章は研究会における発言を忠実に再現したものではないことをお断りする。進行役は小宮山道夫編集室員であり、頼祺一五十年史編集専門委員会委員長、大林正昭同委員会副委員長と宇吹暁同委員会委員の発言には、その姓のみを本文の行頭に付した。なお、沖原氏はこの稿を編集する時点で病氣療養中であるため、文章化は編集室に一任された。

沖原氏は広島文理科大学の在学中から数え、平成元年の退官まで四一年の長きにわたり、広島大学と関わりを持ち続け、学生部長、学部長、学長という大学行政の重責をも果たした人物である。沖原氏の詳細については退官記念録（沖原豊学長退官記念誌刊行会『広島大学四十一年の日々』第一法規、平成二年）をご参照願いたい。

役職に就く以前の沖原氏は、優秀な学生・教官として知られていた。講師時代には教育学部の学部間研究協力協定による派遣第一号に推薦され、フルブライトに合格したのもその証左であろう。この時の経験がその後の積極的な国際交流の推奨に一役買っているものと思われる。

教育学者である沖原氏は、本文中にもあらわれるとおり、学生委員会委員や学生部長の職務に際してはSPSの理念の実践に努めている。新入生オリエンテーションキャンプの実施や学生友好訪中団の派遣など、沖原氏が在職中に実施したさまざまな事業に着目すれば、SPSの理念がそれらに徹底していると感じられる。本文中にはないが、学生部長在任中に当時急増してきたムスリム留学生の信仰生活に配慮するため、大学会館の一室を開放した逸話（『広島大学四十一年の日々』、

九四（九五頁）などもその表れであろう。

ところで学生委員会は昭和四三年五月に設置された全学委員会であり、緊急事態へ迅速に対応するための補導体制改革のひとつとして位置づけられている。広島大学ではこの前年に起こった第二次羽田事件を発端として、四三年の二月に川村智治郎学長のカン詰め事件が起こっており、学内の緊迫感は強まる一方であった。沖原氏はこの委員会の第一期から委員に任命され、四四年には副委員長、四五年からは委員長に任命されていた。

学生委員はその任務に苦勞が多いこともあり、任期は一年と定められ、部局によっては半年で交替することもあった。沖原氏のように三期四年（三期目は任期二年）にわたり学生委員の任にあった人物は珍しく、大学紛争をつぶさに見届けた上での回想は貴重な証言であるといえよう。ただし本文中（四八頁）で紛争当時の回想として、学生部長を「三期六年もそうゆうことをさせられた」と語っているが、学生部長への就任は昭和四八年からであり、恐らく学生委員と言い違えているのだろう。進行役の不用意な発問と当日配付資料に学生委員の任期について明記していなかったために起こった混同と思われる。

教育学部長時代には教育学部が抱えていた大学院整備の問題解決に取り組まれた。沖原氏は学部長就任の前年一月に発足した研究科構想を検討するための委員会、教育学部将来構想委員会第一専門委員会では委員長を務めており、学部長就任にあたっての抱負として大学院整備を第一にあげるなど（「伝統と革新」『学内通信』一六期二号、広島大学広報委員会、昭和五九年五月）、この問題には特別の思いを寄せ

ていたようである。最大の問題点は福山分校の教官を博士課程に組み込むことであつた。当時の教育学研究科は、独立専攻の幼児学専攻を除き、他の五専攻（教育学、教科教育学、教育行政学、実験心理学、教育心理学）全てが博士課程を擁していた。この博士課程のうち教科教育学専攻においては、大学院担当が教科教育担当教官に限られるという偏りがあり、これを是正して教官全体で研究科の指導に当たることとがめざされていた。沖原氏は就任早々にその実現について言及し、

文部省との本格的接触を開始している。これ以降の文部省との折衝において、教員の審査や研究科の整備について内部問題として措置してよいという回答を引き出したことが、その後の展開を早めた契機だといわれている（『広島大学四一年の日々』、一四五～一四七頁）。

沖原氏の学長時代は、長らく停滞していた東広島市への統合移転が再開し、組織改革の面では全学問分野への博士課程設置の実現（昭和六一年）、日本語教育学科の設置など、広島大学の実現研究条件の整備・拡充が進む時期であつた。沖原氏は大学院の整備については、

「（複数の前身校を持つ——引用者注）教育学部の大学院整備の問題は広島大学の大学院問題の縮図だともいえる」（「伝統と革新」と学部長時代から看破されていた。教育学部での経験が全学での実現に大きく作用していたと考えられる）。

なお、統合移転については本文中で激しい誘致運動について述べられている。しかしこの話は、飯島宗一学長が賀茂郡西条町への移転を公表した昭和四八年二月以前の誘致運動の経験であるのか、それともそれ以降の移転完了を催促する陳情の経験であるのかは判然としない。

最後になったが、貴重な講演をしてくださった沖原豊氏に改めて感謝申し上げる。

（小宮山道夫）

沖原豊氏略歴および関連年表

大正13・9・1	山口県柳井市に生まれる。
昭和12・4・10	山口県立柳井中学校入学。
14・3・31	山口県立柳井中学校第二学年修了。
19・9・22	山口師範学校（一部）卒業。
10・10	熊本陸軍予備士官学校入学。
20・6・5	熊本陸軍予備士官学校卒業。
12・26	広島文理科大学教授長田新が広島文理科大学長に就任。
23・4・17	広島文理科大学教育学科入学。
24・5・31	広島大学設置。
25・4・19	元文部大臣森戸辰男が初代広島大学長および広島文理科大学長に就任。
27・8・31	広島文理科大学教育学科中退。
9・1	広島大学教育学部教務履。
28・4・16	広島大学教育学部助手。
昭和32・4・1	広島大学教育学部講師。

- 34・8・27 コロンビア大学ティーチャーズカレッジへ留学(昭和35年7月30日まで)。
- 36・7・1 広島大学教育学部助教授。
- 42・11・11 第二次羽田事件、広大生二〇名逮捕。
- 43・2・20 学長カン詰事件発生。
- 4・24 広島大学学生委員会規程制定(5月1日施行)。
- 5・1 広島大学学生委員会委員(昭和44年4月30日まで)。
- 7・10 教育学博士(広島大学)。「日本国憲法の教育規定に関する研究」。
- 44・2・24 一部学生により教養部新館が封鎖される。
- 5・16 広島大学学生委員会副委員長(昭和45年5月19日まで)。
- 6・17 広島大学大学改革委員会八項目要求専門委員会専門委員(昭和45年2月10日まで)。
- 8・17 警察力導入により、東千田地区の全ての建物の封鎖を解除(18日まで)。
- 11・11 広島大学大学改革委員会学生部改組に関する専門委員会専門委員。
- 45・5・1 広島大学学生委員会委員(昭和47年4月30日まで)。
- 5・19 広島大学学生委員会委員長(昭和47年4月30日まで)。
- 47・4・1 広島大学教育学部教授。
- 昭和47・6・11 総理府第六回「青年の船」団長。
- 48・4・28 第一回オリエンテーションキャンペーン開催(29日まで)。
- 7・20 広島大学学生部長。
- 50・7・20 広島大学学生部長(再選)。
- 51・7・15 広島大学学生友好訪中団団長。
- 52・7・20 広島大学学生部長(三選)。
- 53・12・15 放送教育開発センター運営協議員。
- 6・17 教育学部東雲分校を廃止し、教育学部(二学科七課程)を教育学部(三学科)と学校教育学部(五課程)に改組。
- 7・ 単位認定をともなうテレビ放送講座を全国で初めて実施(10月まで)。
- 54・2・ 第一回留学生による日本語スピーチコンテスト開催。
- 7・19 広島大学学生部長退任(任期満了)。
- 55・9・9 評議会が昭和五三年七月決定の「学部等移転年次計画」のうち、工学部及び生物生産学部の移転時期を変更。
- 56・8・1 日本ユネスコ国内委員会委員。
- 58・1・14 教育学部将来構想委員会第一専門部会委員長。
- 1・18 評議会が「学部等移転年次計画」を全面的に見直し、昭和六四年度移転完了に変更。
- 5・24 臨時評議会が「学部等移転年次計画」のうち、教育学部福山分校の移転時期を昭和六〇年度移転完了に変更。

昭和58・10・1 広島大学評議員。

59・1・18 教育学部将来構想委員会が「教育学研究科の将来構想に関する答申」を提出。

4・1 広島大学教育学部長。

7・11 研究科委員会において大学院担当に関する文部省との折衝結果を報告。

60・3・8 研究科委員会及び研究科教官会が、教科教育学専攻三教科の博士課程後期の整備について了承。

4・18 日本ユネスコ国内委員会アジア・太平洋地域教育開発普及計画分科会主査。

5・21 広島大学長。

7・9 教育学部に外国人日本語研修コースを設置。

61・4・1 教育学部に日本語教育学科を設置。

4・15 評議会が「学部等移転年次計画」を六八年度移転完了に変更、福山分校の移転時期は昭和六四年七月と決定。

10・6 復旦大学（中国）と大学間学術交流協定を締結。

62・1・29 日本ユネスコ国内委員会普及活動小委員会委員長。

7・21 岡本哲彦総合科学部長刺殺事件発生。

63・3・31 生物生産学部が東広島市に移転を完了。

平成元・5・20 退官（任期満了）。

5・23 広島大学名誉教授。